View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kyutacar : Kyushu Institute of Technology Academic Repository

九州工業大学学術機関リポジトリ
Kyutacar
Kyushu Institute of Technology Academic Repository

体育・スポーツにおける動機づけ雰囲気研究の現状と展望

著者	伊藤　豊彦，磯貝　浩久，西田　保，佐々木　万丈，杉山　佳生，渋倉　崇行
雑誌名	島根大学教育学部紀要（教育科学）
巻	42
ページ	13-20
その他のタイトル	A Review of Motivational Climate Research in Physical Education and Sport
URL	http://hdl.handle.net/10228/00006554

体育・スポーツにおける動機づけ雰囲気研究の現状と展望

伊藤豊彦 *・磯貝浩久 **・西田　保 ***・
佐々木万丈 ****・杉山佳生 *****・渋倉崇行 ******

Toyohiko Ito*, Hirohisa Isogai**, Tamotsu Nishida***,
Banjou Sasaki****, Yoshio Sugiyama***** and Takayuki Shibukawa******

A Review of Motivational Climate Research in Physical Education and Sport

要　　約

近年、体育やスポーツにおける動機づけを促進することを目的として、達成目標理論に基づく研究が行われるようになってきた。そこでは、生徒や選手個人の目標志向性とともに、学級やチームの目標構造、すなわち動機づけ雰囲気が達成行動を規定する重要な要因であることが認識されつつある。

そこで、本稿では、体育・スポーツにおける動機づけ雰囲気研究に着目し、その現状の把握と展望を試みた。まず、体育・スポーツにおける動機づけ雰囲気と達成目標及び動機づけ関連要因への影響について検討した結果、体育・スポーツ場面において、クラスやチームの動機づけ雰囲気は、達成目標及び動機づけ関連要因に重要な影響を及ぼすことが明らかになった。しかしながら、諸外国の研究に比較して我が国の研究は少なく、文化的な差異がみられるかなど、今後の検討の必要性が示唆された。さらに、信頼性と妥当性を有する尺度の開発と体育・スポーツにおける動機づけ雰囲気を規定する要因の検討などの必要性が指摘された。

【キーワード：達成目標理論，動機づけ雰囲気，体育・スポーツ，展望】
【Key words: achievement goal theory, motivational climate, physical education and sport, review】

はじめに

近年、体育・スポーツにおける動機づけに関する研究において、達成目標理論（achievement goal theory）が注目されるようになってきた。この理論は、学習場面で児童・生徒がどのような目標を達成したいと認知しているかが学習活動を規定する重要な役割を果たすことを指摘（Ames, 1992a；Dweck, 1986；Nicholls,1989）するものであり、体育・スポーツの領域においても動機づけに重要な意味を持っていることが明らかになりつつある。さらに、最近では、このような個人の達成目標の認知に加え、環境要因としてのクラスやチームの動機づけ雰囲気（motivational climate）が重要な意味をもつものとして注目されるようになってきた。

そこで、本稿では、達成目標理論について概観した後に、体育・スポーツにおけるこれまでの動機づけ雰囲気に関する研究を振り返り、今後の研究課題や方向性について検討することにする。

達成目標理論

前述したように、達成目標理論は、Ames（1992a）、Dweck（1986）、Nicholls（1989）らによって提唱された理論であり、達成場面で人が設定する目標の種類やその意味づけが動機づけを規定するという立場である。スポーツのような達成場面で個人が達成しようとする目標にはさまざまな種類が考えられるが、これまでの研究で、次の２つに大別されてきた。１つは、練習や努力を重視し、スキルの向上や新しいスキルのマスターなどを目標とするもので、熟達目標 (mastery goal)、あるいは学習目標、課題目標などと呼ばれる。もう１つは、能力を重視し、他者より優れていることを誇示したり、高い評価を得ることを目標とするもので、成績目標 (performance goal)、あるいは遂行目標、自我目標などと呼ばれる。

Dweck（1986）によれば、このような目標と行動との関係は表１のように示される。まず、能力を固定したもの、自分では制御できないものと考える場合は、自分の能力が十分か不十分かに注意が向くことから、自我（成績）目標が選ばれる。それに対して、能力は柔軟で増大する可能性があると考える場合は、自分の能力をどのように拡大・進歩させることができるかに関心があることから、課題（熟達）目標が選ばれる。

自我（成績）目標では、他者との比較における自分の位置に関心があるために、他者のパフォーマンスや努力といった外的基準についての情報が必要になり、自分の能力評価が十分か不十分かをいつも気にしていなくてはならない。また、有能感は、自分の進歩や努力だけでは十分でなく、相手を負かしたり、他者より少ない努力で

* 島根大学教育学部健康・スポーツ教育講座
** 九州工業大学大学院情報工学研究院
*** 名古屋大学総合保健体育科学センター
**** 仙台電波工業高等専門学校総合科学科
***** 九州大学健康科学センター
****** 県立新潟女子短期大学幼児教育学科

表１　達成目標と達成行動（Dweck，1986）

能力観	達成目標	現在の能力についての自信	行動パターン
固定理論 →	自我（成績）目標	高い場合 →	熟達志向型
（能力は固定的）	（目標は有能さについて肯定的評価を受け、否定的評価を避けること）		挑戦を求める 高い持続性
		低い場合 →	無力感型
			挑戦を避ける 低い持続性
拡大理論 →	課題（熟達）目標	高い場合 →	熟達志向型
（能力は可変的）	目標は有能さの拡大）	もしくは	挑戦を求める
		低い場合 →	高い持続性

表２　クラスの雰囲気と達成目標（Ames & Archer, 1988, p.261 より一部変更）

雰囲気の次元	熟達（ﾏｽﾀﾘｰ）目標	成績（ﾊﾟﾌｫｰﾏﾝｽ）目標
1. 成功の定義…	上達・進歩	高い順位・他者より良い成績
2. 価値…	努力・学習	他者より高い能力
3. 満足の理由…	熱心な取り組み・挑戦	他者より優れた結果
4. 教師の志向…	生徒がどのように学習しているか	生徒がどのような成果をあげているか
5. 誤りや失敗のとらえ方…	学習の一部	不安を喚起するもの
6. 注意の焦点…	学習のプロセス	他者と比較した自分の成績
7. 努力する理由…	新しいことを学習するため	良い成績・他者よりも優れた結果を出すため
8. 評価の基準…	絶対的基準・進歩	相対的基準

成功したときにはじめて感じることができる。したがって、能力に自信があり能力を誇示できると考える場合は積極的に課題に取り組むが、能力に自信がない場合は、課題への取り組みを避けて能力の低さを隠そうとする。また、失敗は能力が低いことを意味するので、確実に成功できる易しい課題か失敗しても能力の評価に影響しないきわめて難しい課題が選択されやすい。このような極端な課題の選択は、能力に自信がない人ほど顕著で、無力感型と呼ばれる行動パターンとなって現れやすいという。

これに対して、課題（熟達）目標を持つ人は、スキルの獲得や向上に関心があることから、練習方法や自分の進歩など課題の遂行に直接かかわる情報に集中できる。そのため、能力の高さに係わらず、自分の能力やスキルを最大限に高める最適挑戦レベルの課題が選択されやすく、自分の努力それ自体が有能感を高めるものになる。また、課題目標の下での失敗は、努力不足や練習方法の不適切さを示す手がかりになり、新たな方略の選択・実行に向かわせるものとなる。

体育・スポーツ心理学の領域においても、達成目標理論を適用した研究が行われるようになり、達成目標の認知と内発的動機づけ (Duda, Chi, Newton, Walling, & Catley, 1995)、スポーツマンシップに対する態度（Duda, Olson, & Templin, 1991）などとの関連から，選手の達成目標の認知がスポーツにおける動機づけ研究においても重要な研究課題として認識されつつある（Ames,1992b ; Duda,1992 ; Weiss & Chaumeton,1992）。

また、我が国においても、達成目標とスポーツ参加状況（工藤・菊池・菅原，1994)、競技意欲・有能さの認知・内発的動機づけ（伊藤，1996)、体育学習に対する動機づけ（細田・杉原，1999）などとの関連が検討され、成績目標よりも熟達目標を持つほうが動機づけに好ましい影響を与えることが明らかにされている。

このような達成目標と動機づけの関係、とりわけ動機づけに与える熟達目標の有効性は、体育・スポーツにおいても広く支持されている（西田・小縣，2008）ことから、体育学習やスポーツ活動を効果的に進めるためには、目標をどのように設定するかが重要であり、とりわけ熟達目標が有効かつ重要であることが示唆される。

動機づけ雰囲気

ところで、達成目標については、これまでその個人差に焦点があてられていたが、個人内要因としてだけでな

【構造】	【教授方法】	【動機づけパターン】
課題	○学習活動中の重要な面に焦点を当てる ○生徒の関心を引くように目新しい、多種多様な課題を工夫する ○生徒が挑戦しようと思う手ごろな課題を工夫する ○生徒が自分で確認できる短期的な目標を設定できるように援助する ○生徒が効果的な学習方法を考え出し、利用するよう援助する	○努力を重視し、学習に力を注ぐ ○活動自体への関心 ○努力を基本とした学習方法への帰属 ○効果的な学習方法、自分で工夫できる他の方法の利用 ○学習への積極的な関心 ○努力を多く必要とする課題への肯定的な感情 ○帰属意識の獲得 ○失敗に対する耐性
権威	○生徒が意思決定に参加するのを援助することに力を注ぐ ○決定が能力でなく努力に基づくよう“現実味のある”選択肢を提供する ○自己管理と自己モニタリングの技能を発達させ、利用できるように援助する	
評価と承認	○個々の生徒の向上、進歩、習熟に力を注ぐ ○公式的に一般的に評価するのではなく個別的に１人ひとりを評価する ○生徒の努力を認める ○生徒が自分で向上していく機会を与える ○まちがいを学習の一部としてみることができるように生徒を勇気づける	

図１　マスタリー（熟達）目標を進める学級の構造と教授方法（Ames, 1992a；坂西, 1995より引用）

く状況要因としての達成目標の概念が動機づけに有効な役割をもつことが報告されている。

例えば、Ames & Archer(1988) は、熟達目標と成績目標に関連するクラスの雰囲気を分析する枠組みを表２のように設定し、クラスの目標構造（以下、動機づけ雰囲気 (motivational climate) と呼ぶ）に対する認知を測定する尺度を作成するとともに、動機づけ関連要因とどのような関係にあるのかを検討した。その結果、クラスの達成目標を熟達的であると認知する生徒ほど、より多くの学習方略を用い，課題に対する挑戦を好み、クラスに対する態度も好意的であったことなどを明らかにしている。また、わが国においても同様の結果が渡辺 (1990) によって報告されている。

さらに、Ames (1992a) は、Epstein(1988) の TARGET 構造[注1)] を参考に、教師の指導様式、学級風土、学校全体の教育政策などがもつ、特定の目標を強調する特性として、課題・権威・評価と承認の３つの次元を取り上げ、熟達目標を進める教授方法を提唱している（図１）。

動機づけは、これまで個人の問題として扱われることが多かったように思われる。しかしながら、動機づけ雰囲気に関する研究は、学習環境や集団への働きかけという動機づけ研究の新たな方向性を提供している点で重要であり、体育・スポーツ指導の実践的な観点から有益な知見を提供することが期待される。

体育・スポーツにおける動機づけ雰囲気研究

スポーツ場面における動機づけ雰囲気に関して、Seifriz, Duda, & Chi (1992) は、Ames & Archer (1988) の尺度を参考に、スポーツにおける動機づけ雰囲気尺度 (Perceived Motivational Climate in Sport Questionnaire: PMCSQ) を作成した。高校男子バスケットボール選手を対象に、熟達雰囲気（12 項目）と成績雰囲気（9 項目）の２因子からなる尺度と内発的動機づけ、成功の原因についての信念、及び Duda & Nicholls (1992) が作成した課題・自我目標志向性尺度（Task and Ego Orientation in Sport: TEOSQ）との関連を検討した結果、チームの雰囲気を熟達的と認知していることが内発的動機づけや、メンバーであることの満足感，競技不安に効果的な影響を及ぼしていることを明らかにしている。なお、PMCSQ の構成概念及び予測妥当性は Walling, Duda, & Chi（1993) によって確認されている。

さらに、Newton, Duda, & Yin（2000）は、PMCSQ を改良し、コーチによって作り出される動機づけ雰囲気を測定する PMCSQ -2 を開発している。この尺度は、熟達雰囲気次元に①協力、②努力／上達、③重要な役割の３要素を、成績雰囲気次元には①ミスに対する罰、②不平等な扱い、③チーム内競争の３要素をそれぞれ加えた 33 項目から構成される。

一方、体育場面における動機づけ雰囲気に関して、Papaioannou (1994)は、Ames & Archer (1988)などを

参考に、体育における動機づけ雰囲気を測定する尺度（Learning and Performance Orientation in Physical Education Climate Questionnaire; LAPOPECQ）を開発している。この尺度は、学習（熟達）雰囲気として、①教師による学習（熟達）雰囲気、②クラスの学習（熟達）雰囲気、成績雰囲気として、①競争志向、②少ない努力での成功（努力回避）、③失敗への恐れの計５つの次元から構成され、ギリシャの中学生を対象に調査を実施したところ、体育のクラスが学習（熟達）志向的な雰囲気であるという認知と授業に対する肯定的態度や内発的動機づけとの間に関連があることを報告している。

なお、Papaioannou (1998) は、その後、LAPOPECQのうち教師による熟達・成績志向性のみを測定する短縮版（Teacher-Initiated Motivational Climate in Physical Education Questionnaire）を開発している。

また、Goudas & Biddle (1994) は、LAPOPECQを参考に体育授業雰囲気尺度（Physical Education Class Climate Scale; PECCS）を作成している。PECCSは、LAPOPECQのうち４つの下位尺度（クラスの学習志向、教師の学習志向、クラスの競争志向、失敗への恐れ）と選択の機会及び教師の支援に対する認知の２つの下位尺度、計６下位尺度から構成されていたが、因子分析の結果、最終的には以下の５つの次元から体育授業の雰囲気を測定する。PECCSの最終的な下位尺度と項目例は以下の通りである。①進歩の追及（生徒は新しい技術やゲームを習うとき喜ぶ、ベストを尽くす）、②教師による学習志向（一人一人の生徒が少しでも進歩することを喜ぶ、すべての生徒の記録や技能の向上を喜ぶ）、③生徒による比較追求（他の人よりよい成績のときに満足する、他の人より上手にできたときに喜ぶ）、④失敗の恐れ（ミスをしないか心配、失敗を恐れて、むずかしい運動には取り組まない）、⑤教師による比較促進（先生は勝った人に注目します、先生はスポーツがうまいかどうかを気にする）である。なお、PECCSは、フランス語版も作成されている（Biddle, Cury, Goudas, Sarrazin, Famose, & Durand , 1995）。

さらに、Mitchell (1996) は、体育における動機づけ雰囲気に関連して、挑戦・恐れ・競争・統制の４つの下位尺度からなる体育学習環境尺度（Physical Education Learning Environment Scale : PELES）を開発している。

一方、我が国においては、青木（1997）がPapaioannou (1994)を参考に、①教師の学習志向、②学習志向，③協同志向、④競争志向、⑤失敗不安、の5因子から構成される体育学習におけるクラスの動機づけ構造を測定する尺度を開発し、有能感、原因帰属、体育学習の楽しさなどとの関連を検討している。また、伊藤（1997）は、Seifriz et al. (1992) のPMCSQを日本語訳し、スポーツにおけるチームの動機づけ雰囲気を測定する尺度を作成し、目標志向性、原因帰属、競技意欲、チームへの適応感などとの関連を検討している。

以上のような尺度の開発とともに、その後、体育・スポーツに関わるさまざまな動機づけ関連変数との関係が検討されてきた。

例えば、成功の原因についての信念、挑戦的課題の好み、体育の満足感（Treasure & Roberts, 2001）、内発的動機づけやフロー体験（Kowal & Fortier, 2000 ; Parish & Treasure, 2003 ; 藤田・杉原 , 2007）、練習方略や練習行動（Gano-Overway & Ewing, 2004 ; Xiang & Lee, 2002）などへの動機づけ雰囲気の影響が検討されたが、ほぼ一貫して、熟達雰囲気の肯定的影響と成績雰囲気の否定的影響が報告されている。

また、スポーツ選手のバーンアウト（Chi & Chen, 2003）と競技ストレス（Pensgaard & Roberts, 2000）、子どものモラル（スポーツパーソンシップ）（Miller, Roberts, & Ommundsen , 2004）などとの関連において、さらには、教師期待効果（Papaioannou, 1995）やセルフ・ハンディキャッピングの使用（Ommundsen, 2006）などとの関連においても、同様の結果が示されていることから、体育やスポーツの指導に際しては、熟達雰囲気を促進し、成績雰囲気を抑制することが動機づけを高めるうえで有効なことが示唆される（Ntoumanis & Biddle, 1999）。

ところで、以上の研究は、個人の動機づけが、個人の達成目標と同様に、チームやクラスの動機づけ雰囲気によっても影響を受けることを示していることから、体育やスポーツ指導場面において、熟達雰囲気を促すことを目的とした介入プログラムを実践しその効果を検討する試みが行われるようになっている。

例えば、Marsh & Peart (1988) は、女子高校生を対象としたトレーニングプログラムにおいて、協同的（熟達雰囲気）プログラムと競争的（成績雰囲気）プログラムの効果を検討した。その結果、協同的（熟達雰囲気）プログラムが女子高校生の自己概念を向上させたことを報告している。

また、Theeboom, De Knop, & Weiss (1995) は、組織的なスポーツプログラムに参加した小学生を対象に、TARGET構造に基づく熟達プログラムと伝統的プログラムの効果を比較した結果、熟達プログラムの方が伝統的プログラムよりも児童の楽しさ、有能さ、内発的動機づけを促進させたと報告している。

さらに、Solmon (1996) は、院生を教師役として、TARGET構造に基づく熟達雰囲気と競争を中心とした成績雰囲気に基づく指導を行った結果、熟達雰囲気の教師のもとで学習した中学生のほうが練習量が多かったと報告している。

加えて、Digelidis, Papaioannou, Laparidis, & Christodoulidis (2003)は、中学生を対象に、目標設定プログラムの設定、生徒間のコミュニケーションを促進させるペア学習スタイルの導入、プロセス目標（協同目標・個人目標）の重視、認知的方略（リラクセーションなど）の使用促進といった介入プログラムを１年間にわたって実施し、動機づけ雰囲気、目標志向性、及び運動や健康に対する態度に及ぼす効果を検討している。その結果、介入プログラムのもとで学習した生徒、すなわち

介入群は、統制群に比較して、運動に対する肯定的態度を有し、高い課題志向得点と低い自我志向得点を示し、教師が自我関与よりは課題関与を強調していたと報告している。

一方、動機づけ雰囲気に関する否定的な影響に注目したものとして、Standage, Treasure, Hopper, & Kuczka（2007）の研究がある。そこでは、持久走の指導を課題関与的（熟達雰囲気）条件と自我関与的（成績雰囲気）条件のもとで指導を行ったところ、自我関与的条件のもとで指導を受けた中学生のほうが動機づけにとって不適応的なセルフ・ハンディキャッピング方略をより多く使用したと報告している。

以上の介入研究は、動機づけ雰囲気を意図的な努力によって作り出すことが可能なことを示唆している点で重要な知見を提供しているといえる。

体育やスポーツの学習は、体育教師やスポーツ指導者、仲間などとの多様な相互作用を通して多くの影響を受けていると考えられる。しかしながら、これまでの体育・スポーツにおける動機づけ研究は、達成動機、原因帰属、達成目標などの概念を中心に、主として個人内要因が取り上げられてきた。児童や選手にみられる動機づけにおける質と量の両面にわたる個人差の大きさを考えると、体育・スポーツの動機づけ研究が個人内要因に焦点を当ててきたのは当然のことと考えられる。しかしながら、実践場面で多くの児童や選手に対応する必要のある教師や指導者にとって、個への対応は必ずしも容易なことではない。このような意味において、体育・スポーツ場面で動機づけ雰囲気のような状況要因の影響を検討することは、チームやクラスといった集団への動機づけを可能にするという意味においても重要であり、今後さらに多くの研究が行われることが望まれる。

我が国においても体育学習における授業風土（動機づけ雰囲気）の影響を検討した研究（松田・木原・島本, 2006）も見られるようになってきたが、これまでの体育・スポーツにおける動機づけ雰囲気に関する研究の多くが欧米を中心として行われていることを考慮すると、今後、西田・小縣（2008）が指摘する文化的差異に配慮しつつ、さらに多くの研究が行われる必要があろう。

体育・スポーツにおける動機づけ雰囲気研究の最近の動向

体育・スポーツにおける動機づけ雰囲気に関する研究によって、熟達志向的雰囲気が動機づけ関連要因に肯定的な影響を、成績志向的雰囲気が否定的な影響を及ぼすことが明らかにされてきた。その後、いくつかの展開がみられる。

まず、動機づけ雰囲気を測定する尺度の開発に関して、これまでの教師・仲間・学習環境を含む多様な側面からより限定した動機づけ雰囲気を検討しようとする試みが行われていることである。例えば、前述したPapaioannou（1998）は、教師による熟達雰囲気と成績雰囲気のみを測定する尺度（Teacher-Initiated Motivational Climate in Physical Education Questionnaire）を開発している。

また、Ntoumanis & Vazou (2005) は、チームメートの動機づけ雰囲気を測定する尺度として、①進歩（improvement）、②関係性支援（relatedness support）、③努力（effort）、④チーム内競争（intra-team competition/ability）、⑤チーム内の葛藤（intra-team conflict）の5因子からなる尺度（Peer Motivational Climate in Youth Sport Questionnaire; Peer MCYSQ）を開発している。

さらに、Papaioannou, Tsigilis, Kosmidou, & Milosis（2007）は、これまでの体育・スポーツにおける動機づけ雰囲気測定尺度の問題点として、①スポーツ場面を対象としたものが多く、体育場面に適用できないこと、②Newton et al.（2000）のPMCSQ-2におけるメンバーの重要な役割や失敗への罰といった下位尺度にみられるように、直接達成目標とは言えない下位尺度が含まれていること、などを指摘している。そして、達成目標の多目標説を取り入れながら、「熟達目標」、「成績－接近（performance-approach）目標」、「成績 - 回避（performance-avoidance）目標」、「社会的承認（social approval）目標」の4目標から構成される新たな体育用動機づけ雰囲気測定尺度を開発し、教師による動機づけ雰囲気と個人の目標を明確に区別して測定する試みを行っている。

ここで、成績目標における「接近」と「回避」の区別は、同じ成績目標であっても、「良い成績をとりたいから」といった成績－接近目標と「無能だと思われたくないから」といった成績－回避目標とでは、その機能が異なる（Elliot & McGregor, 2001）という指摘に基づくものである。

また、社会的承認目標の導入は、親和動機づけ、承認動機づけ、所属欲求といった一連の社会的な動機づけが学習場面の動機づけに関連するとしたWentzel（1999）の指摘に関連している。このような社会的目標の導入は、体育・スポーツにおけるこれまでの熟達目標－成績目標といった二項対立的な目標に加え、体育・スポーツにおける動機づけに新たな視点を提供するものであり、体育・スポーツにおける実践的な動機づけの指導に有益な示唆を与えるものと期待される。

もう1つは、体育・スポーツにおける動機づけに肯定的な影響を及ぼすことが明らかとなった熟達志向的雰囲気をどのようにして作り出していくのかという実践的研究が増加している点である。前述したように、クラスやチーム全体への働きかけの重要性を考慮すると、さまざまな介入プログラムを検討することは有益な示唆をもたらすことが期待できることから、今後さらに研究される必要がある。

動機づけ雰囲気研究の今後の展望

体育・スポーツにおける動機づけ雰囲気に関する研究を概観してきたが、最後に、今後のいくつかの研究課題について触れておきたい。

まず第１に、欧米における動機づけ雰囲気研究に比較して、我が国における研究は、その質と量ともに必ずしも豊富ではない。したがって、動機づけ関連変数との関連を十分に検討しながら、達成目標理論の適用可能性をさらに検討していく必要がある。

そのためには、体育やスポーツ場面における動機づけ雰囲気を測定する適切な尺度の開発がなによりも求められよう。その際、「接近」と「回避」といった達成目標の区別を指摘する新たな達成目標理論の展開や達成目標と質的に異なると考えられる社会的目標への配慮が必要になろう。社会的目標に関連して、中谷（1996）は、向社会的目標と規範順守目標から構成される社会的責任目標が児童の学業達成に影響を及ぼすことを明らかにしている。また、スポーツにおいても、個人志向性と社会志向性からなる社会的な目標の重要性が指摘されている（磯貝・徳永・橋本，2000）。このような社会的な目標は、他者との協調が重要視される我が国において、重要な影響が予測されることから、達成目標の文化差への配慮とともに、今後、十分検討される必要がある。

また、前述したPapaioannou, et al.（2007）の新しい動機づけ雰囲気尺度では、狭義の達成目標と達成目標に影響する環境要因を区別し、教師がつくりだす動機づけ雰囲気に限定した尺度の開発が進められている。体育・スポーツ指導への実践性を考慮したとき、いずれの方法が適切かは議論を待たねばならないが、いずれにしても、今後、欧米とは異なる文化的背景を持つわが国独自の尺度の開発とその精緻化がさらに求められよう。

ところで、これまで動機づけ雰囲気が動機づけに及ぼす影響を検討する場合、従属変数として、内発的動機づけや成績などが取り上げられることが多かった。しかしながら、達成目標は達成行動への価値づけであり、学習課題、学習状況をどう評価するかに影響する（上淵，2004）こと考えると、動機づけ雰囲気は、上記の動機づけ関連要因以外の体育・スポーツの学習場面における多様な要因に重要な影響を与えることが予想される。

例えば、Ames & Archer（1988）が指摘するように、熟達雰囲気にあふれた学習場面が他者との成績を比較することよりは学習のプロセス自体を重視し、たとえ失敗したとしても不安を喚起しにくいものであるとするなら、近年話題となっている体育授業における心理社会的ストレスへの適応（佐々木・西田・伊藤・磯貝・杉山・渋倉，印刷中）やライフスキルの獲得（杉山･渋倉･西田･伊藤・佐々木・磯貝，2008）など、体育学習の新たな可能性を示唆する要因との関連を検討することで、動機づけ雰囲気の新たな効果を確認することにつながるかもしれない。今後、是非検討してみたい。

最後に、どのような要因が体育・スポーツにおける動機づけ雰囲気を規定するのかという、動機づけ雰囲気の規定因に関する研究の必要性があげられる。

これまでの介入研究の多くは、Epstein（1988）のTARGET構造を理論的背景としたものが多いが、教師の指導様式や学校全体の教育方針、自律性支援といった教師の具体的な行動や信念、さらには親との関係など多様な要因が動機づけ雰囲気に影響すると考えられる。これらの影響を検討することは、動機づけ雰囲気を焦点に、体育・スポーツ指導に有効な情報を提供できると考えられる。

教育場面において、学習意欲を高めるための一般化された教育方法を導くことが困難な理由として、鹿毛（2007）は、学習意欲が①場との相互作用によって生じ、②不安定で「波」があり、③その質と量には個人があることをあげている。

動機づけの難しさは、体育・スポーツにおいても同様であるが、体育・スポーツにおける動機づけ雰囲気に関する研究はこのような困難な課題に対して新たな視点を提供するものであり、有益な示唆が期待できると考えられる。今後、さらなる実践研究が幅広く行われることを期待したい。

注１）TARGET構造とは、①課題（task）、②権威（authority）、③報酬（reward）、④グルーピング（grouping）、⑤評価（evaluation）、⑥時間（time）の次元である。

文　献

Ames, C. (1992a) Classroom: Goals, structures, and student motivation. *Journal of Educational Psychology*, 84, 261-271.

Ames, C. (1992b) Achievement goals, motivational climate, and motivational processes. In G.C. Roberts (Ed.), *Motivation in sport and exercise*. Human Kinetics. Pp.161-176.

Ames, C., & Archer, J. (1988) Achievement goals in the classroom : Students' learning strategies and motivation processes. *Journal of Educational Psychology*, 80, 260-267.

青木作衛（1997）小学校体育学習における動機づけに関する研究：クラスの動機づけ構造の測定による自己評価活動の効果．パイデイア：滋賀大学教育学部教育実践研究指導センター紀要５（2），37-40.

坂西友秀（1995）学級の雰囲気と動機づけ．新井邦二郎（編）教室の動機づけの理論と実践．金子書房，pp．130-147.

Biddle, S. , Cury, F. , Goudas, M., Sarrazin, P., Famose, J-P, & Durand, M. (1995) Development of scales to measure perceived physical education class climate: A cross-national project, *British Journal of*

Educational psychology, 65, 341-358.

Bortori, L. , Colella, D. , Morano, M. , Berchicci, M. , Bertollo, M. , & Robazza, C. (2008) Teacher-initiated motivational climate in physical education questionnaire in an Italian sample. *Perceptual and Motor Skills*, 106, 207-214.

Chi, L., & Chen, Y-L. (2003) The relationship of goal orientation and perceived motivational climate to burnout tendency among elite basketball players. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 25, S40-41.

Digelidis, N., Papaioannou, A., Laparidis, K., & Christodoulidis, T. (2003) A one-year intervention in 7th grade physical education classes aiming to change motivational climate and attitude towards exercise. *Psychology of Sport and Exercise*, 4, 195-210.

Duda, J.L. (1992) Motivation in sport settings: A goal perspective approach, In G.C. Roberts (Ed.), *Motivation in sport and exercise*. Human Kinetics. Pp.57-92.

Duda, J.L., Chi, L., Newton, M.L., Walling, M.D., & Catley, D. (1995) Task and ego orientation and intrinsic motivation in sport, *International Journal of Sport Psychology*, 26:40-63.

Duda, J.L. & Nicholls, J.G.（1992）Dimensions of achievement motivation in schoolwork and sport. *Journal of Educational Psychology*, 84: 290-299.

Dweck, C.S. (1986) Motivational processes affecting learning. *American Psychologist*, 41,1040-1048.

Elliot, A. J., & McGregor, H. A. (2001) A 2 × 2 achievement goal framework. *Journal of Personality and Social Psychology*, 80, 501-519.

Epstein, J. L. (1988) Effective schools or effective students: Dealing with diversity, In R. Haskins and D. MacRae (Ed.) *Policies for America's public schools: Teachers, equity, and indicators*. Ablex Publishing. Pp.89-126.

藤田　勉・杉原　隆（2007）大学生の運動参加を予測する高校体育授業における内発的動機づけ．体育学研究，52, 19-28.

Gano-Overway, l. A. & Ewing, D. C.(2004) A longitudinal perspective of the relationship between perceived motivational climate, goal orientation, and strategy use. *Research Quarterly for Exercise and Sport*, 75, 315-325.

Goudas, M. & Biddle, S. (1994) perceived motivational climate and intrinsic motivation in school physical education, *European Journal of Psychology of Education*, 9, 241-250.

細田朋美・杉原　隆（1999）体育の授業における特性としての目標志向性と有能さの認知が動機づけに及ぼす影響．体育学研究，44, 90-99.

磯貝浩久・徳永幹雄・橋本公雄（2000）スポーツにおける個人・社会志向性尺度の作成．スポーツ心理学研究，27, 22-31.

伊藤豊彦（1996）スポーツにおける目標志向性に関する予備的検討．体育学研究，41, 261-272.

伊藤豊彦（1997）スポーツにおけるチームの動機づけ雰囲気に関する研究．山陰体育学研究、12, 21-30.

鹿毛雅治（2007）教育実践におけるかかわりと学び．中谷素之（編）学ぶ意欲を育てる人間関係づくりー動機づけの教育心理学ー．金子書房，pp. 89-107.

Kowal, J. & Fortier, M. S.（2000）Testing relationships from the hierarchical model of intrinsic and extrinsic motivation using flow as a motivational consequence. Research *Quarterly for Exercise and Sport*, 71, 171-181.

工藤孝幾・菊池喜子・菅原　治（1994）子どものスポーツにおける達成目標とスポーツ参加状況ー身体的コンピテンスとの関わりー．福島大学教育実践紀要，25，61-68.

Marsh, H. W. & Peart, N. D.（1988）Competitive and cooperative physical fitness training programs for girl: Effects on physical fitness and multidimensional self-concepts. *Journal of Sport & Exercise Psychology*, 10, 390-407.

松田泰定・木原成一郎・島本　靖（2006）小学校体育授業における運動技能の習熟と競争の結果の認知に関する事例的研究ー授業風土と目標志向性の認知を視点としてー．スポーツ教育学研究，26，25-40.

Miller, B. W., Roberts, G. C., & Ommundsen, Y. (2004) Effect of motivational climate on sportpersonship amoung comprtitive youth male and female football players. *Scandinavian Journal of Medicine and Science in Sport*, 14, 193-202.

Mitchell, S. (1996) Relationships between perceived learning environment and intrinsic motivation in middle school physical education. *Journal of Teaching in Physical Education*, 15, 369-383.

中谷素之（1996）社会的責任目標が学業達成に影響を及ぼすプロセス．教育心理学研究，44，221-227.

Newton, M., Duda, J. L., & Yin, Z.（2000）Examination of the psychometric properties of the Perceived Motivational Climate in Sport Questionnaire-2 in a sample of female athletes, *Journal of Sport Sciences*, 18: 275-290.

Nicholls, J. G. (1989) Conceptions of ability and achievement motivation: A theory and its Implications for education. In S.G. Paris, G.M. Olson, & H.W. Stevenson (Eds.), *Learning and motivation in the classroom*. Lawrence Erlbaum Associates Pp. 211-237.

西田　保・小縣真二（2008）スポーツにおける達成目標

理論の展望．総合保健体育科学，31，5-12.

Ntoumanis, N. & Biddle, S. J. H. (1999) A review of motivational climate in physical activity, *Journal of Sports Sciences*, 17, 643-665.

Ntoumanis, N. & Vazou, S. (2005) Peer motivational climate in youth sport: Measurement development and validation, *Journal of Sport & Exercise Psychology*, 25, 432-455.

Omumundsen, Y. (2006) Pupils' self-regulation in physical education: The role of motivational climates and differential achievement goals. *European Physical Education Review*, 12, 289-315.

Papaioannou, A. (1994) Development of a questionnaire to measure achievement orientations in physical education, *Research Quarterly For Exercise & Sport*, 65 : 11-20.

Papaioannou, A. (1995) Differential perceptual and motivational patterns when different goals are adopted. *Journal of Sport & Exercise Psychology*, 17, 18-34.

Papaioannou, A (1998) Students' perceptions of the physical education class environment for boys and girls and the perceived motivational climate, Research *Quarterly for Exercise & Sport* , 69 : 267-275.

Papaioannou, A. , Tsigilis, N. , Kosmidou, E., & Milosis, D. (2007) Measuring perceived motivational climate in physical education. *Journal of Teaching in Physical Education*, 26, 236-259.

Parish, L. E., & Treasure, D. C. (2003) Physical activity and situational motivation in physical education: Influence of the motivational climate and perceived ability. *Research Quarterly for Exercise and Sport*, 74, 173-182.

Pensgaard, A. M., & Roberts, G.C. (2000) The relationship between motivational climate, perceived ability and sources of distress among elite athlete, *Journal of Sports Sciences*, 18, 191-200.

佐々木万丈・西田　保・伊藤豊彦・磯貝浩久・杉山佳生・渋倉崇行（印刷中）心理学的ストレス研究からみた体育授業の今日的課題．東北体育学研究．

Seifriz, J. J., Duda, J. L., & Chi, L.（1992）The relationship of perceived motivational climate to intrinsic motivation and beliefs about success in basketball, *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 14, 375-391.

Solmon, M. A.（1996）Impact of motivational climate on students' behavior and perceptions in a physical education setting. *Journal of Educational Psychology*, 88. 731-738.

Standage, M., Treasure, D. C., Hopper., K., & Kuczka, K.（2007）Self-handicapping in school physical education: The influence of the motivational climate. *British Journal of Educational Psychology*, 77, 81-99.

杉山佳生・渋倉崇行・西田　保・伊藤豊彦・佐々木万丈・磯貝浩久（2008）学校体育授業を通じたライフスキル教育の現状と課題．健康科学，30，1-9.

Theeboom, M. De Knop, P., & Weiss, M. R. (1995) Motivational climate, psychological response, and motor skill development in children's sport: A field-based intervention study, *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 17, 294-311.

Treasure, D. C. & Roberts, G. C.（2001）Students' perceptions of the motivational climate, achievement beliefs, and satisfaction in physical education. *Research Quarterly for Exercise and Sport*, 72, 165-175.

上淵　寿（2004）自己制御学習におけるコーピングモデルの提唱．心理学研究，75，359-364.

Walling, M. D., Duda, J. L., & Chi, L.（1993）The perceived motivational climate in sport questionnaire: Construct and predictive validity. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 15, 172-183.

渡辺弥生（1990）クラスの学習目標の認知が生徒の学業達成に及ぼす影響について．教育心理学研究，38，93-99.

Weiss, M.R. & Chaumeton, N. (1992) Motivational orientation in sport. In T. S. Horn (Ed.), *Advances in sport psychology*. Human Kinetics. Pp. 61-99.

Wentzel, K. R. (1999) Social-motivational processes and interpersonal relationships: Implication for understanding at school, *Journal of Educational Psychology*, 91, 76-97.

Xiang, P. & Lee, A. (2002) Achievement goals, perceived motivational climate, and students' self-reported mastery behaviors. *Research Quarterly for Exercise and Sport*, 73, 58-65.

付記

本研究を行うにあたり、科学研究費補助金・基盤研究（B）（課題番号：18300203，研究代表者：西田 保）の助成を受けた。